［研究論文］

文学の技法（1）

干　井　洋　一

一連の論考において各種の文学技法を体系的に論じていく予定である。本論文を含めた数回はシンボルを取り扱う。まずは代表的な文学辞典の定義を参照しつつ，シンボルの本質とその働きを様々な側面から検討する。

I

文学の専門用語を扱う辞典としては『研究社英米文学辞典』が標準的なものであるが，本辞典にはシンボルの項目が記載されていない（Symbolism の項目のみ）。そのため，以下では上記辞典を実質的に引き継ぐ形となっている『20 世紀英語文学辞典』の定義を記す。

> ある事物が，別のものを，特にそれ自体を超えた何ものかを類比によって表わすとき，これを symbol という。・・・（中略）・・・Schelling の symbol 論は，Coleridge に強い影響を与える。Coleridge は，特殊なものの中に一般的なものが，一般的なものの中に普遍的なものが，そしてとりわけ一時的なものの中に永遠なるものが透けて見えるのが symbol であると定義している。symbol はロマン派の詩人の作品に特徴的に見られる。・・・（中略）・・・Blake の ‘The Tyger’ や ‘The Sick Rose’ でも，虎や薔薇がそれら自身を超えたものを暗示している。[1]
>
> （下線は筆者）

次に『ウェブスター文学百科事典』の定義を引用する。この定義の特徴は，『20 世紀英語文学辞典』のものと異なり，一般に用いられるシンボルと文学作品の中で用いられるシンボルとを区別していることである。

> Something that stands for or suggests something else by reason of relationship, association, convention, or accidental resemblance; especially, a visible sign of something invisible (for example, the lion is a symbol of courage and the cross is a symbol of Christianity). In this sense all words can be called symbols, but the examples given — the lion and the cross — are really metaphors: that is, symbols that represent a complex of other symbols, and which are generally negotiable in a given society (just as money is a symbol for goods or labor). These are considered public symbols in that they are universally recognized. The symbols used in literature are often of a different sort: they are private or personal in that their significance is only evident in the context of the work in which they appear.[2]　（下線は筆者）

二つの辞典の定義を詳しく比較してみよう。前者の定義では，シンボルはその語が意味しているものを「超えた何もの」かであり，その語自体と「超えた何もの」かを結んでいるのは「類比」ということになる。一方，後者の定義では，シンボルはその語が意味しているものとは異なる「別の何か」であり，両者をつなぐものは，何らかの「関わり，連想，慣用，偶然の類似」である。

二つの定義を比較すると相当違いがあることがわかる。まず，後者の定義においては，シンボルが表すものは「別の何か」であり，そのシンボルが通常もつ一義的意味を「超え」るという制

限がない。また，その一義的意味と，シンボルが指す象徴的意味との間のつながりを「類比」に限定せず，何らかの「関わり，連想，慣用，偶然の類似」というように，より広くとっている。この結果，『ウェブスター文学百科事典』の方が，シンボルのもつ象徴的意味をずっと広義に捉えていることになる。しかしながら，そのことは直ちに「この意味では，すべての語をシンボルとみなすことができる」という説明に自然につながっていくわけではない。少々大胆すぎるとも思える，上の説明に関しては，次節では取り上げず，作品を具体的に分析していく節である第 III 節以降において再度取り上げることとする。

II

『20 世紀英語文学辞典』では，ブレイクの詩 'The Tyger' で唱われている「虎」をシンボルの具体例として挙げている。本節では，虎というシンボルを念頭に置きながら，シンボルには「公的なものと私的なものがある」という定義について考えてみる。

虎という語を目にした人はどのようなことを思い浮かべるだろうか。ある人は夜行性の獰猛な捕食動物，ネコ科の大型哺乳類といった具合に，分類学的な内容が頭に浮かぶかもしれない。別の人は，動物園で柵越しに見た実際の虎を思い浮かべ，恐怖に駆られるかもしれない。また虎がもつ，ある種の威厳といったものが最初に思い浮かぶ人もいるだろう。このように虎という語がもつ視覚的なイメージとそれが喚起する内容は当然のことながら人によって異なる。しかし虎という語が人々に力強さや恐怖の観念を呼び起こすという点では相当程度の共通性があるといえるだろう。

ある語がシンボルとして機能するときには，その語がもつ視覚的イメージや一義的な意味内容より上位にある，「それ自体を超えた何ものか」が表現されている。『ウェブスター文学百科事典』は，「抽象的なものを具体的なもので表す」というシンボルの働きを挙げており，具体例として，「獅子」が「勇気のシンボル」として機能するという例を挙げている。（後述するように，虎も勇気のシンボルとして機能する。）

上の説明の後，『ウェブスター文学百科事典』は２つのタイプのシンボルを挙げ，人々に共有されている公的なシンボルと，文学作品の中で機能する私的なシンボルとを分けているが，この区分について次の２点を強調しておきたい。１点目は，私的なシンボルというカテゴリーを設けることで，作品に対しより緻密なシンボル分析が行えるようになることだ。２点目は，実際にシンボル分析を行っていくと，どこまでが公的でどこからが私的なのかという境界が必ずしも明瞭ではないということである。これらについては短編作品を具体的に分析しながら次稿以降で詳述する。

次に公的なシンボルについて考えてみたい。たとえば英語圏において lily という語が果たすシンボリックな役割と，日本語圏において菊という語が果たすシンボリックな役割との大きな違いを考えれば，公的シンボルという概念が，特定の文化を形作る，特定の言語のもとで重要な意義を持っていることがわかる。それでは，シンボルとしての虎という語が一般的に備えている象徴的意味にはどのようなものがあるだろうか。この点に関しては『イメージ・シンボル事典』が大いに助けとなる。本事典は虎という語について次のような象徴的意味を挙げている。

・勇気
・美，優美
・（夜の徘徊者としての）偽り，狡猾さ，無慈悲，残酷，嫉妬[3]

『イメージ・シンボル事典』は英語圏において一般的に受け入れられている象徴的意味だけでなく，他の文化圏における象徴的意味や，古典的作品の中で用いられている象徴的意味も列挙している。そして虎という語の項目においては，次節で分析するブレイクの作品 'The Tyger' に対する

言及もある。

III

ブレイクの詩 'The Tyger' におけるシンボルの働きを具体的に考えてみよう。まずは作品分析を行いながら，文学作品においては，当該作家によって創り出された「私的シンボル」が用いられることが多いという『ウェブスター文学百科事典』の説明について考えてみたい。

ブレイクの詩 'The Tyger' は非常に優れた作品であり，韻律面も含め総合的に分析すべきではあるが，本論ではシンボルに関連する側面のみを扱うこととする。まず最初の２連を引用する。

Tyger, Tyger, burning bright,
In the forests of the night:
What immortal hand or eye
Could frame thy fearful symmetry?

In what distant deeps or skies,
Burnt the fire of thine eyes?
On what wings dare he aspire?
What the hand dare seize the fire?[4]

作中の虎が指しているものは単に自然界に棲む獣ではなく，もっと大きなもの，より抽象度の高いものであることに異論は出ないだろう。しかしながら，この作品において，虎および「虎を生み出した存在」をどのように捉えるべきなのかに関しては様々な解釈があり得る。

まず第１連について，多様な解釈の分岐に踏み込まない形で内容をまとめるならば，以下の３点に集約することができる。

・夜の闇の下「畏怖を抱かせる均衡」を備えた虎が森の中にいること
・その虎を創り出した「不死の手や眼」を備えたものが存在すること
・虎の創造に関し，詩人が重い問いを発していること

さらにもう一歩を進めようとすると，冒頭の連のみに限っても，数限りない問いが生じてくる。主なものをいくつか挙げてみよう。

・虎は何を表しているのだろうか
・「あかあかと燃え」ているものは何なのだろうか
・漆黒の森の中に立つ虎の両眼が爛々と輝いている様が唱われているのだろうか
・暗闇で眼が炯々と輝くことは本来ないはずである，この箇所では「創造という行為それ自体」を象徴している虎がもつ超越的な力を形容して 'burning bright' と唱っているのだろうか
・それとも虎は悪を象徴しているのだろうか，本作品の対となる詩 'The Lamb' における子羊と対比されているのだろうか
・虎が棲む「夜の森」とは，悪が跋扈する恐ろしい場所を意味しているのだろうか
・『天国と地獄の結婚』等において作者ブレイクは相矛盾するものの合一を唱えているが，この作品においても虎は善と悪の双方を包含した両義的存在なのだろうか
・「不死の手や眼を備えたもの」とは絶対者である神を指しているのだろうか，それとも悪を生み出したものを指しているのだろうか

‘The Tyger’ の第２連を再度引用する。

In what distant deeps or skies
Burnt the fire of thine eyes?
On what wings dare he aspire?
What the hand dare seize the fire?

この連においても様々な問いが生じてくる。主なものをいくつか挙げてみよう。

・前半の２行は創造主がどこで虎を生み出したのかを問うているのだろうか
・後半の２行は美しくも恐ろしい虎を生み出した存在，畏怖の対象としての創造主を詠ったものなのだろうか
・そうではなく，虎が生み出された場所が天界（‘skies’）なのか，冥界（‘deeps’）なのかを問うているのだろうか，つまり，虎はこの世に存在する悪そのものを象徴しており，それを「敢えて」生み出したものは，有翼の存在である堕天使ルシファーではないかと詩人は問うているのだろうか
・４行目の「火」（‘fire’）は単に虎の眼を表したものなのだろうか，それとも，善と悪とを包含した両義的存在である虎が持つ力を喩えたものなのだろうか
・人類に火をもたらしたとされるプロメテウスは，土から人を創り出した神でもある。虎が，創造の際に発揮される神秘的な力を象徴していると解するならば，４行目の火はプロメテウス神話への引喩であるととらえるべきなのだろうか
・火を盗んだ罰として生きながら肝臓を鷲に食われ続けるプロメテウスが言及されているのだとすれば，さらに踏み込んで，善と悪との両義性を象徴している虎は，プロメテウスが擁護した人間とも重ね合わされていると解することも可能なのだろうか

このように ‘The Tyger’ 冒頭の２つの連を詳しく見ていくと，『ウェブスター文学百科事典』が説明するように，優れた文学作品においては，当該作家によって創り出された豊かな「私的シンボル」が用いられることがわかる。

そして重要なことは，その語がもつシンボリックな意味が，読者によって異なるということだろう。読者はその文学的なバックグラウンドの違いに応じて，その語自体や，その語を取り巻く作中表現が表しているものに対し，それぞれ独自の解釈を行うことになる。というのも，読者の解釈に影響を与えるものは，中心的シンボルを成す語が備えている「公的」な象徴的意味だけでなく，その語自体や，その語を中心に構成されている作中の言語的ネットワークが呼び起こす，様々な先行テクストでもあるからだ。そして，読者それぞれが自身の解釈を行うときには，単なる文学的引喩に留まらず，文学作品以外の様々なテクストもインターテクスチュアルな形で自らの解釈に組み込まれることになる。

IV

ブレイクの詩に対する様々な解釈を前提として，「すべての語をシンボルとみなすことができる」という少々強引とも思える『ウェブスター文学百科事典』の説明について考えてみよう。第１に，中核を成すシンボルである「虎」以外の，重要なシンボルを以下に挙げてみる。「不死の手」（‘immortal hand’）をもつもの，「恐ろしい均衡」（‘fearful symmetry’），「遠い海または空」（‘distant deeps or skies’），「翼」（‘wings’）をもち「飛翔する」（‘aspire’）もの，「彼」（‘he’），「光の槍」（‘their spears’），天を潤す「涙」（‘tears’），「子羊」（‘Lamb’）などを重要なシンボルと見なすことができる。この作品が虎という中心的シンボルを中核に据えつつ，数多くのシンボルを配する形

で構成されており，そのことが作品の多様な解釈を生み出す原動力となっていることは衆目の一致するところであろう。

第２に，通常はシンボルとなる語は名詞に限定されることになるが，その名詞を修飾する語群も象徴的意味を形成する上で極めて重要であることを指摘したい。まず，文学辞典の定義を再度確認しておこう。『ウェブスター文学百科事典』において，シンボルは何らかの「もの」（‘something’）と定義されており，この定義をとるならば，この「もの」を表す語は名詞となり，「すべての語をシンボルとみなしうる」という説明における，「すべての語」とは名詞のみを指していることになる。以上の定義は概ね妥当なものなのだが，作品はどのような形で意味を紡ぎ出しているのかという面を具体的に見ていくと，中核を成すシンボルを「形容する言葉」自体（＝各種の修飾語）も，そのシンボルが担う象徴的意味の多様性に合わせて，様々な意味を帯びるようになることがわかる。一方，修飾語がもつ様々な意味自体が，逆に，中核を成すシンボルが表す象徴的意味に影響を与えるケースも多い。この意味では，様々な意味を生み出す修飾語自体も，象徴的意味を生み出す上で重要な役割を果たしているといえるだろう。

この点を踏まえながら，以下ではブレイクの詩の第１連より３語を選んで，具体的に考えてみたい。それらの３語とは，中核となるシンボルである「虎」（‘Tyger’），虎を形容する語である「あかあかと燃える」（‘burning bright’），「恐ろしい均衡」（‘fearful symmetry’）である。なお２番目の語である ‘bright’ は形容詞ととるのが普通であるが，名詞ととることも可能であろう。

まず冒頭の語 ‘Tyger’ がもつ象徴的意味をいくつか列挙する。

・神の御業である創造という行為そのもの
・一見恐ろしきものに見えるが，実は神が創られた良きもの
・全能者が創造した世界であるにもかかわらず，現世に存在する悪のこと
・善でもあり悪でもあるもの
・畏怖の念を呼び起こす「崇高」そのもの（ロンギノスの唱える崇高）
・創造を可能にする芸術上の力
・「神の怒りや罰」である「神の火」[5]
・「浄化」
・「人間の魂の中の暗い，恐怖をいだかせる側面」

次に ‘Tyger’ をどのように捉えるかによって，次の２語 ‘burning bright’ の意味も変わってくる。

・虎の両眼が炯々と燃えているという意味
・創造という神の御業が顕現している様を表している
・一見恐ろしいもの（最終的には予定調和的に解消されうるもの）が顕現している
・この世に悪が存在することが明示されている
（‘burning bright’ は悪が栄える様を表している）
・善でもあり悪でもある存在が露わになっていること（後の ‘symmetry’ と呼応）
・崇高そのものが顕現している様を表している
・物事を創り出す芸術上の力が深淵（‘the forests of the night’）より生じてくる様
・「神の火」が燃えさかっている様
・人の魂の奥底に潜むものが露わになっている様

３つ目として ‘symmetry’ についても考えてみよう。この語もシンボルとして重要な役割を果たしている。

・「恐ろしい均衡」（‘fearful symmetry’）は虎の両眼のことを指している
・獰猛で畏怖すべきものが，神が造り給うたものでもあるという謎を唱っている
・全能の神が造り給うた世界に，なぜ恐ろしきものや悪しきものが存在するのかという重い問いを形にしたもの

・一見悪と見えるものも実は試練でしかなく，絶対者から見れば，世は良き秩序のもとにあるということを意味している
・善でもあり悪でもある存在，たとえば人間存在そのものを唱っている
・現世で善と悪とが拮抗している様子を唱っている
・善と悪との合一を象徴している

ロラン・バルトは文学作品を ‘lisible / readerly’ なテクストと ‘scriptible / writerly’ なテクストに分けた。[6] 前者は作品を読むことで，作者によって創られた作品世界が自然と浮かんでくるような作品タイプであり，後者は作品が言語構築物であることを否応なく意識させられ，読者自らが作品の解釈を選び取っていくような作品タイプである。ブレイクの ‘The Tyger’ はまさに後者の作品タイプに当たる。ブレイクのテクストにおいては，虎というシンボルを頂点に，様々なシンボルが巧みに配置され，その結果，虎が何を表しているのかという中核的な問いは，他の多くのシンボルが何を表しているのかという問いと深く結びついている。このように scriptible なテクストにおいては，互いに影響を与え合う，豊穣な言語ネットワークが複雑に紡ぎ合わされる。さらに，その言語ネットワークを構成する各語や，それを組み合わせた語群が作品外の数多くのテクストと交錯し合うことで，‘The Tyger’ は実に多様な解釈に開かれたテクストとなっているのである。

実際に作品分析を行なうとシンボルに対する理解はより深まっていくものの，同時に難しい問題も生じてくる。一つは，公的シンボルと私的シンボルとを判然と分けることが可能かどうかという問いである（これについては既に第 II 節で触れている）。いま一つは，私的シンボルが表す象徴的意味と，読者が scriptible なテクストにおいて構築する象徴的意味との関係である。この二つ目の問いは次のような問題と深く関連しているといえるだろう。

・読者による多様な解釈が存在することについて
・シンボルが担う意味を確定することについて
・シンボルに関する作者の意図と読者による多様な解釈との関係について

上の三つの問いについてはシンボルに関する一連の論考の最終稿で再度触れることとしたい。

V

本節では，「ある事物」（『20 世紀英語文学辞典』）や「あるもの」（『ウェブスター文学百科事典』）ではなく，作中の登場人物や彼らの言動などがシンボルとして機能するケースを取り上げる。「事物」や「もの」以外もシンボルとして機能すると述べている『ベドフォード文学批評用語辞典』は次のようにシンボルを定義している。

> Something that, although it is of interest in its own right, stands for or suggests <u>something larger and more complex</u> — often an idea or a range of interrelated ideas, attitudes, and practices.
>
> Within a given culture, some things are understood to be symbols: the flag of the United States is an obvious example as are the five intertwined Olympic rings. More subtle cultural symbols might be the river as a symbol of time and the journey as a symbol of life and its manifold experiences. Instead of appropriating <u>symbols generally used and understood within their culture, writers often create their own symbols by setting up a complex but identifiable web of associations in their works</u>. As a result, <u>one object, image, person, place, or action</u> suggests others and may ultimately suggest a range of ideas.[7]　（下線は筆者）

上の定義は本稿の冒頭に挙げた二つの定義に比べ，より体系的な定義といえるだろう。大きな違いは３点ある。まず第１に，シンボルによって表されるものは，「より大きくより複雑なもの」で

あると定義している。すでに挙げた辞典と比べると，「それ自体を超えた何ものか」であるとする『20 世紀英語文学辞典』の定義に近く，「他の何ものか」（something else）であるとする『ウェブスター文学百科事典』の定義より絞られたものとなっている。

第２に，特定の文化において共有されるシンボルと，作品の中で生み出されるシンボルとの区別をしている。これは，シンボルを public symbols と private symbols とに二分した『ウェブスター文学百科事典』の定義と同じだが，『ベドフォード文学批評用語辞典』の定義の方が，文学作品中でのシンボルの働きがよりわかりやすく説明されている。マーフィン氏は，「作家は作品中で，複雑ではあるものの見分けることのできる連想の網の目を張り巡らすことで，作者独自のシンボルを創造することがしばしばあるのだ」と述べ，シンボルという技法がどのように用いられるのかについて詳しく説明している。

第３に二つの定義では述べられていない，重要な説明が『ベドフォード文学批評用語辞典』には追加されている。「もの」だけがシンボルとなるのではなく，「イメージ，人物，場所，行動」もシンボルとなりうることを明記していることである。一方，『20 世紀英語文学辞典』ではシンボルは「ある事物」に限定されており，同じく，『ウェブスター文学百科事典』では something としか定義されていない。具体例として挙げられた，「ライオン」や「十字架」からもそれは窺える。

次稿以降では英米の短編小説をいくつか具体例として取り上げ，作中に描写された事物だけでなく，イメージ，場所，登場人物，彼らの言動などがシンボルとして機能し得ることを分析していく予定である。またシンボルに関する労作を著しているティンダルのシンボル分析に対する検討も行いたい。

注

1 『20 世紀英語文学辞典』（研究社 , 2005）シンボルの項.

2 *Merriam Webster's Encyclopedia of Literature* (Merriam Webster, 1995) Symbol の項.

3 アト・ド・フリース『イメージ・シンボル事典』（大修館 , 1984）Tiger の項．一部の箇所を変更.

4 William Blake, *Selected Poetry* (World's Classics, 1996), 121-2. 一部の表記を変更.

5 『イメージ・シンボル事典』（大修館，1984）Tiger の項．下の二つ「神の火」「浄化」「人間の魂の中の暗い，恐怖をいだかせる側面」も同様.

6 Roland Barthes, *S/Z* (Hill and Wang, 1975), 4.

7 Ross Murfin, et al. *The Bedford Glossary of Critical and Literary Terms* (Bedford, 2003), 370.